

飛び級小学生の同級生

ミズヤ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

飛び級制度がある現代日本。

ごくごく普通の学生生活を送っていた春日部陽真はそんな飛び級制度を他人事のように思っていた。

自分の人生には何も影響を与えることは無いだろうと、そう思っていた。

高校二年生に進級した春、陽真のクラスに小学生くらいの女の子、美海結菜が飛び級で編入してくる。

陽真はごくごく平凡な生活を送りたいがために、そんな上流階級な結菜とは一線を引いて生活をしようとするものの、陽真の生活は結菜によってどんどんと崩れていく。

果たして陽真はロリコンになってしまうのか!?

気まぐれ更新でやって行きます。

あまり更新速度には期待しないで下さい。

タグは今後も追加していく可能性があります。

目次

第1話	他人事のように思っていた	1
第2話	困り果てた状況	5
第3話	先輩は後輩君と遊びたい	9
第4話	妹を思っ	13
第5話	不思議なやつ	18
第6話	雨のち晴れ	22

第1話 他人事のように思っていた

飛び級、それは成績が良いものだけに与えられる特権。

いくつかの過程を飛ばし、一気に上の学年に進級することが出来るという制度である。

その制度がある為、成績上位者と成績が悪い者の差がどんどん出てきてしまう。

そんなんで本当に良いのかと思うものの、それで通ってしまうのが、今の世の中だ。

俺、春日部陽真は成績は中の下、ごくごく平凡な学生だ。

ごくごく普通の学生生活を送り、これまで順当に小、中、高と進級、進学してきた。

そのため、そんな制度は自分には全く関係なく、一生飛び級なんてものと関わりないと、そう思っていた。

今日までは――

高校二年生に進級した春、今回も飛び級などはせずに普通に一年生から進級、そしてクラス替えを終えた。

見てみると小さい頃からの親友も同じクラスということであんまり教室に向かう。

「小崎さん、緊張しなくていいからね」

「は、はいー」

「校長室はこつちよ」

何やら出雲海先生いずみうみが小学生くらいの子を連れて歩いていた。

親と一緒に来たのか？ それで出雲先生が案内役になったんだろうな。まあ、俺には関係ないか。

朝なので眠気が襲ってきて欠伸をしながら廊下を歩いていると、ようやくこれから自分の教室になる教室を見つけた。

二年B組だ。

少し人見知りを発動させ、おどおどしながら教室に入り、周囲を見渡した。

するとそこには見知った人物が椅子に座ってスマホをいじっている

る姿があった。

「おーい、ゆき」

「ゆきって呼びなゆきって、女みたいだろうが」

「悪い悪い、雪季」

こいつの名前は真繰まぐる我雪季わせつき。

こいつとは小学校からの幼なじみ。お互いに気心知れているので、あまり気負わずに接することが出来る。

ちなみに俺はこいつのことをゆきって呼んでいる。名前の雪だけ取ったものだ。

だが、ゆきはこのあだ名が気に入らないみたいで、呼ぶ度に訂正される。

「何やってんだ？」

「ああ、ソシヤゲの周回」

「よく飽きねえな」

「ふふん、俺のソシヤゲ愛を舐めるなよ！ 周回ごときで飽きていたらそれは偽りの愛、真実の愛は周回という壁を乗り越えた先に存在するのだ！」

「おおー」

って、かつこよく言ってるけど、ただソシヤゲのことを語っているだけだよな。

それにソシヤゲに真実の愛とか偽りの愛とかあんのか？ 俺はあまりソシヤゲをやらないから分からねえ事だな。

俺が好きなのはやっぱり対人ゲームだ。駆け引きを乗り越えた先にある勝利を掴み取るあの感覚は一度味わうと止められなくなる。

「あ、今来てるピックアップが出た」

「え」

一応俺もこいつのやっているソシヤゲをインストールしているため、たまにログインしてプレイすることはある。

そこで気まぐれでガチャを引いてみたらピックアップが出た。

これはあまりやらないが、嬉しい気分になる。おみくじで大吉引いた気分と近しいものがある。

「お、おい、それって俺もでてないキャラ……課金までしたのに出なかったキャラを、あつさり……」

「……悪いな、俺は運がいいみたいだ」

「この運だけで勝ち残ってきた亡者が！」

ゆきがものすごく荒れているが、何だかゆきに勝ったようでとてもいい気分だ。

そこで時計を見てみるともうそろそろホームルームが始まる時間だということに気がついた。

そのため、半狂乱になっているゆきを放置して自分の席を探し出して、その席に座った。

「みんなく座ってー！」

そこでチャイムがなると同時に先生が教室内に入ってきた。その先生はついさつき廊下ですれ違った出雲先生だ。

出雲先生は教卓にやって来るとこつちに向き直った。

その様子を見て全員自分の席に座る。

「はい、今日からこのクラスの担任になる出雲海です。みんな、よろしくね」

女性の先生ということで男子諸君は喜びの声を上げる。

ただ、出雲先生はそこまで色気というものを感じさせないため、お堅い先生という印象を受ける。

どうしてこんなに出雲先生のことを知っているのかと言うと、一年生の頃も同じく出雲先生が担任だったのだ。

担当教科は数学、どの生徒にも分け隔てなく優しい先生なので、生徒人気はかなり高い先生だ。

「早速なんだけど、編入生が居るから紹介するね。それじゃあ入っておいで」

編入、その言葉が引つかかった。

さつき見た光景を思い出してまさかと言う考えが脳裏を過ぎる。

そしてその考えは見事に的中してしまった。

入ってきたのは小学生くらいの女の子で、俺たちよりも一回りも二回りも小さい制服を不恰好に着こなしている。

その見た目には制服はあまり似合っているとは言えないものだったものの、大変可愛らしい女の子であることは確かだ。

その女の子はその小さい手でチョークを掴み取ると、黒板に背伸びをしながら精一杯自分の名前を書いていく。なだ、背が低いので下の方に書くことになって非常に読みにくい。

だが、これは間違いないだろう。

俺は今まで他人事のように思っていた飛び級制度。それが実際に存在していることを今、身をもって味わっている。

「私は小崎結菜おぎきゆいなです！ よろしくお願いします！」

「彼女ば何度も飛び級を繰り返して進学してきたそうです。年下の子ですが、みなさん仲良くしてあげてね」

みんな、飛び級とはいえ小学生位という事実^に絶句して決まって声も出ない状況に陥っているようだった。

だが、その中で数名の男子がかなり興奮して騒いでいる。そいつらは真正正銘のロリコンだ。

「それじゃあ、小崎さんの席は春日部くんの席の前に空席を作っておいたからそこに座ってね」

「はい」

何故かホームルームが始まってもこの席だけ誰も座っていないなと思ったらそういう事だったのか。

小崎さんと俺の名前はおとかなので、五十音順に並べると順番に並ぶことになる。だから、席の順番としては小崎さんが一番前で俺が二番目だ。

「よし、それじゃあ本当にホームルームを始めるよ」

その後のホームルームは、その前に起きたことが衝撃的すぎて頭を離れず、内容が全く頭に入ってこなかった。

第2話 困り果てた状況

side陽真

昼休み、午前の授業を無事に終え、休憩することが許された時間。だが、俺が休まることは無さそうだ。

俺の席は一番後ろの席で、一番後ろって言ったら落ち着ける席だと俺は思っている。

だけど、俺の正面の席が小崎の席のせいで、周囲が騒がしくなってしまうっている。

転入、転学したらよくあるイベント、質問タイムだ。その輪の中に俺は強制的に入れられてしまっている。

周囲には大勢の女子と数人の陽キャ男子が集まって小崎に質問をしている。そして当の本人である小崎は自分よりも一回りも大きい人達に囲まれてしまったため、おどおどしている。

まあ、勉強が出来ても大きい人相手に恐怖を抱くのは同じようだ。俺も同じくらいの年齢で同じ状況だったら少なからず恐怖してしまうだろう。

だが、皆はそんなことお構い無しだ。

この状況、小崎の為ならば止めるのが正解なんだろう。だけど、俺は無償で他人のために動く様な聖人じゃない。そもそも、俺と小崎はなんの関係もないんだから助けてやる義理もない。

だけど、この状況下で心が落ち着くわけもないので、俺は一人ひっそりと教室を抜け出した。

そしてそんな俺が向かったのは中庭だ。

この学校はなかなか大きな中庭が存在している。そこは結構昼食スポットとして人気だ。俺もよく使わせてもらっている。

とは言っても、俺の使っているスペースは壁際の省スペースのみだ。中心には噴水があつて、とてもいい場所なのだが、そんな場所を堂々と使うのは俺にとってはかなりハードルが高い。

「はあ……」

地面に座り込み、膝の上に弁当を広げるとため息をついてしまっ

た。

この午前中のみでかなり疲れてしまった。

誰も悪くは無いんだが、これが午後も続くのだと思うと憂鬱である。

「サボろうかな」

「誰だい、そんな悪いことを言っているのは」

「え、先輩」

「よ、春日部くん」

俺が呟いた瞬間に、タイミング悪く登場した女性。

この女性は俺が一年生の頃からの知り合いである柊紗季先輩だ。

この人とは部活で知り合った。まあ、今はもう退部しているんだけど、その後もこうして交流してくれる先輩だ。

「何かあったの？」

「まあ、ちょっと色々あって混乱しているというか……実は俺のクラスに小学生くらいの女の子が飛び級で転入してきたんですよ」

「なるほどね、それでロリコンの君にとってその状況はどうなんだい？」

「最高ですね……って、ロリコンじゃないですよ！ 最高どころか最悪ですよ！」

「ははは、ノリツツコミとはさすがだね！」

いつもこの人は俺の事をいじってくる。

ちなみに俺は断じてロリコンなどではない。

むしろ、近くに小崎がいることによつて精神的負荷が物凄いことになってる。

「なるほどねえ……小さい女の子だったら大丈夫かな」

「何か言いました？」

「ううん、なんでもないよ。それより、今日ゲーセン行かない？」

「あ、いいですね」

「私も練習してきたんだから」

「ほう、じゃあその実力を楽しみにしていますよ」

「まっかせて！」

俺たちはこうしてよく一緒にゲーセンに行く。

俺たちがよくやるのは格闘ゲームだ。柘先輩は格闘ゲームの練習をしてきたと言っているのだ。

ちなみに俺の唯一得意なゲームが格闘ゲームなのだ。それでも雪には勝てることは少ないんだけどな。

雪は苦手なゲームが無いんじゃないかって言うくらいにゲームが上手い。一つ言うとしたら運が悪いことくらいだろう。

あと一勝でランクが上がるところで自分よりも圧倒的に格上の相手に当たるといのが雪だ。

それに、あいつが神引きした所を一度も見た事がない。良いレアのものを引き当てるのも数ヶ月に一回程度だ。

ただ、何で最低レア度の武器で上位ランカーと渡り合えてんのか本当に不思議である。

「よし、じゃあそんなお疲れな春日部くん先輩からいいものを上げよう」

「いいもの？」

すると柘先輩は自分の弁当箱を広げて俺におかず一品を提供してきた。

「たこさんウィンナーですか。随分と可愛いものを作ってきたんですね」

「ふふん、私はこれでも料理ができるからね。感謝するんだぞ」

「はい、ありがとうございます」

俺は柘先輩から頂いたウィンナーを食べる。

うん、美味しい。柘先輩からはこうして定期的におかずが提供されるのだが、そのどれもが美味しい。

特に俺はウィンナーが好きなので、たまたまなんだろうけど柘先輩がくれるものはウィンナー系のおかずが多いことは素直に嬉しい。

「美味しいです」

「良かった。じゃあまた作ってきてあげるからね」

「そんなにくれなくても良いんですが」

「私があげると言ってるのだから遠慮する必要はないんだよ」

ピシツと額にデコピンされた。

柊先輩の力じゃそんなに痛くはなかった。

「ありがとうございます。これで午後も頑張れそうです」

「それは良かった。何かあったら先輩に言うんだよ。春日部くん力になつてあげるからね」

「はい、ありがとうございます。いつもお世話になつてばかりですみません。いつか返させてください」

そんな俺の言葉を聞いて柊先輩は二ヘラと口を曲げるとこう言い放った。

「じゃあ、体で返してもらおうかな？」

「え？」

「冗談だよ冗談！」

「じよ、冗談ですか」

不覚にもドキツとしてしまった。

いつもからかわれているのに俺は学習しないな。

そして少しドキドキしながらも弁当を柊先輩と食べて昼休みは終了した。

第3話 先輩は後輩君と遊びたい

side 陽真

午後の授業、やはり高校生の集団の中に一人いる小学生は小さいものの、存在感はかなり大きく、チラチラと他の生徒たちがこつちの方を見てきている。

もちろん俺の方ではなく小崎の方を見ているのだろうが、なんだか見られているような感じがして落ち着かない。

ただ、適応力だけは高いので段々と慣れては来ている。

こうして居眠りをする事が出来る程度には。

「おい、春日部え」

「あ、先生」

「居眠りはするなよオ、お前は一年の頃から教師の中でブラックリスト入りしてるんだからな」

社会の教科担任、蓮井伯先生はすいはくが眉間に皺を寄せながら俺の事を見ている。

この表情はガチでキレている表情だ。

そう言えば蓮井先生には完全に目をつけられていたのを忘れていた。

「次は無いと思え。次寝たら宿題を増やすぞ」

「はい！ すみませんでした！」

勉強嫌いの俺にとつては宿題増やすぞは死刑宣告に近い。

蓮井先生が宿題を増やすのとはかの先生が宿題を増やすことではレベルが違うって話だ。そんなとてつもない量の宿題はやりたくない。

とはいえ、蓮井先生の声は眠くなるのだ。催眠効果があるに違いない。

そんなこんなで何とか無事、社会を乗りきった。

今のが六時限目だった為、これで帰ることが出来る。そう考えて帰り支度をして未だにクラスのやつらに絡まれている小崎を後目に教室を去る。

校門前に着くと、俺は柘先輩へ校門前に着いたという旨のメッセ―ジを送った。

すると三秒くらいで既読が着いて了解と送られてきた。

その直後だった。俺の視界が誰かの手によって塞がれてしまった。「だーれだ」

正直声で丸わかりである。だけど、少しからかいたいという悪戯心が芽生えてしまったので少し泳がすことにした。

「誰だ？ うーん……あ、もしかして隣のクラスのレイス・ハルバトナー？」

「本当に誰!？」

俺が予想外の名前を上げたせいで声の主が混乱しているのが丸わかりである。

ちなみに、この名前は実在しない架空の人物の名前である。今考えた。

「もう……分かっていくくせに」

「はいはい、早かったですね先輩」

「うん、掃除当番は今日はなかったからね」

「そう言っても引き受けるのが先輩じゃないですか」

「そ、そうだったっけ？」

そう、この柘先輩はちよろいもので、直ぐに他人の掃除を引き受けてしまうのだ。

そのため、一部の生徒からはちよろい人と認識され、なにか理由をつけてよく掃除を押し付けられているのだ。

だが、俺はただそいつらがサボりたいだけだと知っている。この前、偶然聞いてしまったのだ。

『おい、柘のやつちよろかったわ。バイトに行くって言ったら簡単に代ってくれた』

『おいおい、お前はバイトないじゃねえか』

『ははは、ウケるだろ？ お前も今度押し付けたらどうだ？』

『お、それはいいな!』

これが目撃者の気持ちなのだろうか。

これをバカ正直に柘先輩に伝えるべきなのか、それともこのお人好しを辞めるように説得するべきなのか。

柘先輩は心がガラス細工のようにもろいから、この話を伝えたらきつと人間不信になるに違いない。

これが俺の最近の悩みである。

「と、とりあえず早く行こう？ 久しぶりに春日部くんとゲーセンに行くから楽しみなんだ」

「俺も楽しみですよ。先輩の動き、面白いですから」

「もう、酷いよ後輩くん」

俺の冗談交じりの言葉を聞いて柘先輩は俺の頬をつんつんとつついてくる。

俺は前髪も目までかかっており、誰が見てもくらい陰キヤだ。それに対し先輩は誰が見ても超絶美人という程の女性。ただでさえ、隣同士で歩いているだけで異質なコンビなのに、そんなことをされたら周囲の生徒たちに怪訝な目を向けられてしまう。

俺は注目を浴びたくないのだ。

「先に行きますよ」

「あ、春日部くんのいけずう」

「いけずでもなんでもいいですから」

俺は早足でその場を後にする。

その後を柘先輩が小走りで追いかけてきた。

少し歩いたところで直ぐに行きつけのゲーセンが見えてきた。だが、そんなにゲーセンに来ることは無いけどな。

ゆきや柘先輩と来る時しかゲーセンは来ない。俺の格ゲーの腕前は家庭用ゲーム機で鍛えたのだ。

「それじゃあ、早速対戦しよう！ 本当に練習してきたんだから」

「はい、それじゃあ始めましょう」

俺たちは対面に並んでいる格ゲーのゲーム機の椅子に座って対戦を始める。

柘先輩が使えるキャラクターは余りいないので、結構動きを読むことが出来る。俺の方はほとんどのキャラを満遍なく使いこなすこと

が出来る。

ちなみにゆきは全てのキャラを使ってくる。だから動きが読みにくいのだ。それに、そのキャラじゃ厳しいだろうという予想外の動きをするから苦戦するのだ。

さて、今回柘先輩が使ってくるキャラはいつも使ってくるキャラと同じだ。果たして、先輩はどれほど強くなっているか。

「覚悟してよく私、強くなったんだから」

「はい、楽しみです」

そうして対戦を開始したのはいいのだが――

「待つて待つて、それは反則!」

「……」

「ちよつと、それ弱いんだから!」

「……」

「ああんちよつと!」

「……」

「やめてえええつ!」

「……」

さつきからずつとこの状態である。

確かに柘先輩は成長していただろう。これまで俺の繰り出したコンボに為す術もなかった柘先輩が一度はコンボを抜け出したのだ。

だけど、次に違うコンボを使ったらこの状況になった。

なんだか、柘先輩の悲鳴がエロい。

周りにいる客の視線が痛い。

「ああ……また勝てなかった……」

「また相手しますよ」

「今度は負けないわ!」

「はい、またよろしくお願いします」

そして俺と柘先輩はゲーセンの前で解散して各々、家に帰ることになった。

だが、俺は直ぐに家に帰ることはなく、スーパーにたちよることにした。

第4話 妹を思つて

side 陽真

ゲーセンから歩いてすぐのスーパーにやってきた。もう食材がほとんどなかった記憶があったため、食材の買い出しに來ているのだ。

ちなみに俺は今、妹と二人暮らしをしている。とはいえ、複雑な家庭環境という訳でもない。

俺は両親共々、いい関係を結んでいる。

だが、俺がこの高校を志望したため、必然的に一人暮らしへ、そして妹が今年、俺に着いてきたため、今は妹と二人暮らしだ。

親は妹を溺愛していたため、俺を恨んでいなければいいのだが……。

「お、この豚肉安いな。買つていくか」

バックの豚肉を手にとると買い物カゴの中に入れる。

ちなみに今は親の仕送りで生活している。なので、節約第一だ。安いものがあつたら優先的にそっちの方を買う。

ゲーセンに行くのは付き合いでだ。一人でなんて無駄遣いのような気がして、行かないのだ。

そう言えば、プリン食いたいとか言っていたな。ついでに買つていくか。

プリンを買い物カゴの中に入れてながら俺は妹にプリンを渡した時の反応を想像する。

『ほらよ、食いたいって言ってたから買ってきたぞ』

『ありがとうお兄ちゃん！ お兄ちゃんは優しいから大好き！』

もちろんこんなことは無いが、昔の妹ならばこんな可愛いことを言ってくれたなど想像して自然と顔がにやけてしまう。

買い物かごの中に入れたものをレジに持っていく、精算すると、それら全てをマイバックに詰めて足早にスーパーを後にする。

今日はもう帰つてゆつくりと休みたい気分だったのだ。

俺は完全に陰キャで髪で顔がかなり隠れて根暗な雰囲気がある。

そのため、クラスの中の視界には俺は入っていないとわかっているものの、流石にあれだけ近くの奴に視線が向いていたら俺も視界に入るもので、落ち着かなくてかなり疲れてしまった。

「今日は帰ってすぐ寝るか。晩飯の時間になったら起こしてくれるだろうしな」

帰り道をあくびしながら帰っていく。

すると、杖を着いたおばあちゃんが重そうな買い物袋を腕にぶら下げてゆつくりと横断歩道を渡っているのが見えた。

今日は直ぐに帰りたい気分だったものの、俺の性格的にそれを見て見ぬふりはできなかった。

「おばあちゃん、荷物をお持ちしましょうか？」

「あら、いいのかい？」

「はい、もちろんです！」

「じゃあ、ここを渡り切るまでお願いできるかね。家はもうすぐなんだ」

「喜んで」

俺はおばあちゃんから買い物袋を受け取ると、おばあちゃんと並んで横断歩道を渡っていく。

この横断歩道は長いので、渡り切るのはなかなか大変なのだろう。そしてゆつくりと横断歩道を渡り切ると、俺はおばあちゃんに買い物袋を返した。

「本当にありがとうねえ」

「いえ、当然のことをしただけですので。それでは、気をつけて帰ってください」

俺は駆け足で渡ってきた横断歩道を引き返した。

渡り切ると同時に歩道側の信号が赤になったので、かなりギリギリだった。

一日一善、いいことをすると気分がいい。

足取り軽く家に帰ると、ドアを開けて家に入る。

「ただいま」

「あ、おかえりお兄ちゃん」

俺をエプロン姿で出迎えてくれたのは我が妹、春日部栞里^{しおり}。

料理中だったからだろうか。長いその髪をポニーテールにして登場した。

その手にはおたまが握られている。

「今ご飯を作ってるからね」

「あ、そういうえば食材買ってきたぞ。冷蔵庫の中身、もうあまり無かつただろ」

「あ、ありがとうお兄ちゃん、助かるよー」

につこりと笑みを浮かべて俺から買い物袋を受け取ってキッチンへと戻って行った栞里。

それを見送ると俺も家へ入ろうと靴を脱いで家に上がった直後。

「あ、プリンー！」

どうやら栞里は買い物袋の中に入っていたプリンを見つけたらしい。

とても嬉しそうな声色でお兄ちゃんとしてはこの声を聞いて満足だ。

すると、キッチンから走って戻ってきた。その手にはおたまの代わりに三個入りのプッチンプリンが握られていた。

「もしかして買ってきてくれたの？」

「まあ、ついでだ」

「ありがとう！ でも、お金は大丈夫なの？ 無駄遣いに厳しいお兄ちゃんがプリンを買ってきてくれるなんて」

「食いもんなんだから無駄遣いじゃないだろ。それに、ちゃんと管理しているからそれくらいは問題ない。プリンくらいだったらいくらでも買ってやるから」

「~~~~っ！」

俺がそう言って栞里の頭を撫でてやると、栞里は顔を紅潮させて走ってキッチンに戻って行ってしまった。

なんだったんだ一体。

でもまあ、怒っていたって感じじゃないし良いか。

俺は手を洗ったあと、リビングへ向かってソファーに横になる。

ここのソファァーに寝転がると自然と瞼が重くなってくる。このソファァーが一番俺にとって居心地がいい。硬さと言い、寝転がるに最適なソファァーだと思う。

そんな感じで寝転がっていると、食欲をそそるいい臭いが漂ってきた。

栞里はとても料理が上手だ。

きっかけは分からないのだが、急に料理を作り始めたかと思ったら、それからずっとハマって実家にいた頃は母さんの手伝いとして料理しており、今となつては完全に家の料理担当は栞里になつてしまつた。

栞里が越してきたのは二週間ほど前の話なのだが、その時に俺がほとんど毎食、冷凍食品で済ませている言葉バレて、そこから栞里が料理を担当することになった。

自慢の妹だ。今の栞里ならばどこに出しても恥ずかしくはないだろう。だけど、そう簡単に栞里は渡さないけどな。

「はーい、ご飯できたよお兄ちゃん」

「お、美味そうだな」

俺は栞里の声を聞いて体を起こして、料理へと視線を向ける。

そこには物凄く美味しそうな料理達が並べられていた。どれも食欲をそそるいい臭いを放っている。

「うん、やっぱり栞里は完璧だな」

「はあ……妹として兄の将来が心配です。私が嫁に行ったらどうするの?」

そんなの決まりきっているじゃないか。

「まず、相手の男をぶっ飛ばす」

「お兄ちゃん!？」

「栞里が欲しければ俺を倒してみろってことだ」

「大丈夫だね。お兄ちゃんはひよろひよろもやしだからその条件は簡単にクリアできるね」

「……………」

「じ、冗談だよ!」

ちよつと妹のひよろひよろもやしつて言葉に傷ついてしまった。
確かに俺はひよろひよろでもやしかもしれない。だけど、俺だつて
脱いだら凄いなだからな！

第5話 不思議なやつ

side陽真

「お兄ちゃん、起きて」

「うーん……」

俺はまだ眠たいが、その重たいまぶたを開けると、視界に制服姿の我が妹、栞里が飛び込んできた。

とても似合っているその制服。今日が妹の入学式だ。

在校生は入学式に出席しないで、普通の授業である。

「やっぱり似合ってるな」

「あ、ありがとう……じゃなくて、朝ごはん出来てるからね。早く準備して来てね」

それだけ言うと、顔を真っ赤にして駆け足で俺の部屋を出ていった。

そういえば、昨日寝る前に親からメールで今日、入学式に来るって言われたな。なんで俺にメールしたのかは分からないけど。だって、俺は入学式に参加しないんだから。

俺は欠伸をしながら登校の準備を済ませてリビングに向かうと、軽めの朝食がテーブルの上に置いてあった。

「あ、お兄ちゃん。早く食べちゃって」

「え、まだまだ時間があるからゆっくりでいいだろ」

「お兄ちゃんの部屋の時計、ズレてるんだよ。電池変えていないでしょ」

「えっ？」

栞里に言われてリビングの時計に目を向ける。

すると、驚くことに俺の部屋の時計よりも30分も時間が進んでいるじゃないか。いや、俺の部屋の時計が遅れているだけなのだが。

直ぐに朝飯を食って出ないとギリギリの時間だ。

「急ぐわ」

「あ、慌てて食べて喉に詰まらせても困るから、落ち着いて食べてね」
忙しいと言うのに俺の心配をしてくれる栞里は優しい、自慢の妹

だ。

そして急いで朝食を食べ終わった俺は家を飛び出していく。学校までの距離は少しあるので、俺は走っていくことにする。

このペースで走っていけばどうにか間に合うだろう。10分ほど走ると校門が見えてきた。

多くの生徒が歩いているのを見て安心する。だが、その中に異質なのはやっぱり、一際小さい小崎だ。

如何にもランドセルを背負っていそうな小ささの女の子が高校の制服を着て登校してきているとかなり目立つものだ。

ほとんどの人は校門前では触らぬ神に祟りなしというように近づかないのだが、中には小崎を見てニヤニヤしている奴もいる。

危ないロリコンの匂いがする。

教室へ行くと、俺は昨日と同じようにゆきに絡みに行く。

「よ、ゆき」

「ゆきじゃないって……」

読んでいた本を閉じて俺の方へ視線を向けるゆき。

「で、昨日はかなりやつれた様子だったね」

「まあ、あの席は俺には向いていない」

「陰キヤだもんね。多くの人の視界に写るのは耐えられないか」

「否定はしないが、かなり悲しくなるから止めてくれ」

そんな会話をしていると小崎が教室内に入ってきた。

するとすぐに大勢の女子たちに囲まれる小崎。昨日と同じように萎縮してしまっている。

そんな光景を後目に自分の席に座って一時間目の授業の準備を進める。

それから携帯を取り出してゲームを開始する。といっても、そんなにやりたいと思うようなゲームがないので、暇つぶし程度の気持ちでプレイしていく。

ただ、小崎が逃げるように席に来てても女子たちが一緒にこっちに来るので、穏やかにゲームをやっている場合じゃなくなる。

というか、今日も質問攻めにされているが、昨日も質問攻めをして

いたのによくネタが無くならないものだ。

授業が始まった。

一時間目は国語の授業、小崎は確かに天才少女で、当てられた問題を直ぐに正解してみせる。

小崎が問題で長考しているのを見たことがない。

どうやら、かなり知識の引き出しが多いようだ。どの教科もパーフェクト。

「それでは、前後の人でペアを組んでこの問題に取り組んでください」

「……え」

「春日部くん、なんですか？」

「いえ、なんでもありません」

授業の中で一番の地獄の時間、ペアで問題に取り組むという時間だ。

俺は他人と上手く話すことが出来ないため、この時間だけは本当に苦手だ。

しかも、俺のペアと言うと、小崎である。余計に喋られない気がする。

仕方が無いので小崎へと向き直ると、小崎は俺の事をじっと見つめてきていた。

「なんだ？」

「いえ」

この瞬間、俺の小崎への評価が厄介な奴から不思議なやつへと変わった。

そしてペアワークが始まった。

「この問題はこうですね」

と言っても、ほとんど小崎一人で課題を終わらせていくので、俺は必要ない気がする。

俺が問題を解く前に小崎が全て解答欄を埋めていくので、俺はただ見ているだけとなっている。

すると、突然小崎の手が止まった。

「どうしたんだ？」

「いえ、ただ、なんかあなたは違うなって」

「どんな風にだ？」

「……私に話しかけに来ないじゃないですか」

「俺はじゃれ合うのが苦手なんだ」

「そうなんですか」

それだけ話すと小崎は問題を解くのを再開した。

どういう意図でその質問をしてきたのかが全く分からない。

天才少女の考えは凡人には理解できないって言うことなのかね。

第6話 雨のち晴れ

side陽真

就業のチャイムが学校全体に鳴り響く。これを合図としてどんどんと生徒たちが下校していく。

皆も疲れた表情だが、俺は多分ホームレスのように絶望にも似た疲れた表情をしていることだろう。

今日は栞里が入学式だったものの、入学生は午前で帰るから学校内で会うこともなかったし、漫画やアニメのように一緒に帰るとかいう展開もなかった。

そもそも、兄弟一緒に仲良く登下校っていうのは幻想だ。確かに小さい頃は小学校などに一緒に登下校していたものの、同級生なんかに栞里がからかわれたのをキツカケに一緒に登下校しなくなった。あの頃が懐かしい。

そんなことを考えながら歩いていると玄関にたどり着いたので、俺は靴を外履きに履き替えて下校し始める。

しかし、雨が降り始めて来てしまったため、近くのバス停の中で雨宿りをさせてもらうことにした。

凍えるような寒さが肌を刺す。

「これは少し長引きそうかな。栞里に連絡しておくか」

そして俺はメッセージアプリで栞里に遅れる旨を送った。こんなことならば折りたたみ傘でも買ってバッグに入れておくべきだったか。

そう思いながらバス停の中で携帯を弄りながら雨が収まるのを待つ。

すると、バス停の前を小崎が通っていくのが見えた。

だが、視界の橋でちらつと見えた程度であり気にしていなかったのだが、その直後、何人かの手に急に腕を引かれて行く姿が見えた。

普段だったら俺もあんまり気にしないし、他人がどうなろうと知ったことではない。

だが、目の前の席だけあって、このままスルーするのも夢見が悪

くなってしまう。

俺は穏やかで平穏な時を過ごしたいだけなんだけどな。

「はあ……我ながらめんどくさい性格しているな」

俺は重い腰を上げてベンチから立ち上がり、小崎が引っ張られて行っただ方へと走っていく。

そこは人通りの少ない路地で、気の強そうな女子と屈強な男が数人、小崎を囲って立っていた。

普段、小崎は顔をあまり変えないで対応しているものの、今回はかりは目に恐怖の色が浮かび上がっている。

それもそうだ。小崎は見た目からして小学生くらいだ。飛び級したとはいえ、年齢的にはいくつも上の男女に囲まれて恐怖しないわけが無い。

「ねえ、あんた、少し勉強できるからって調子乗ってるよね」

「い、いえ、そんなことは」

「正直、あんたみたいなのはウザいんだよね。だからさ、消えてくれな
い？」

「……っ！」

ポキポキと手を鳴らしながら近づく屈強そうな男たち。

アイツらは見たことがある。学校内でも態度が悪いと先生方に目をつけられている連中だ。そしていい噂は聞いた試しがない。

それどころか、悪い噂しか入ってこない。

恐らく、小崎はそんなヤツらの怒りを買ってしまったのだろう。ただ、小崎は悪くない。アイツらが勝手に怒っているだけだ。

流石にあれじゃ小崎が気の毒で仕方がない。

すると男の一人が拳を振り上げて、勢いよく振り下ろした。

「じゃあ、消えてもらおうぞ」

「ひっ」

それを見た瞬間、俺の体は反射的に動いていた。

俺にとって小崎はどうでもいいが、目の前で殴られるのをただ見ているのは、負い目を感じてしまっただ教室内に居づらくなってしまふ。

「おい、ちょっと待っててくれないか」

「あ？」

振り下ろされた腕の手首をがっしりと掴んで止めて見せた。

間一髪だった。少しでも遅れていたら小崎が殴られているところだった。

「なんだテメエ」

「まあまあ、落ち着いて」

「そんなにぶっ殺されてえならお前から消してやるよ！」

「ええ」

なんか矛先が俺の方に向いた。

だが、その方が都合がいい。それならば、守ることが出来る。

すると、男は俺に掴まれていない逆方向の手で殴りかかろうとしてきたものの、俺はその拳を受け止めて全力で握る。

「ぐあああああつ」

男が悲痛の叫び声をあげる。

今、全力で握ったからすこし骨にヒビが入っているかもしれないな。

「おいおい、そいつはひよろひよろだぞ？ そんなに力あるわけないじゃねえか。遊んでやるなよ」

「ひやははははは」

男の醜態を見て他の奴らは大笑いするものの、これは遊んでいる訳では無い。本気で叫んでいるのだ。

俺は昔からこんなひよろひよろの姿だから勘違いされてきた。まあ、こういう場合、相手が勝手に勘違いして油断してくれるから有難いことではあるものの、男としてはもつと男らしい体つきに見られた方が良かった。

すると、いつの間にか拳を握っていた男が泡を吹いて倒れてしまっていた。

それに気がついて俺は手を離す。

「おいおい、良くも俺たちの仲間にやってくれたな」

すると、他の男たちもどんとどんと寄ってくる。

面倒なことこの上ないが、相手をしてやることにしよう。

「ぶっ殺す！」

なんか物騒なことを言っただけで殴りかかってくる男たち。だが、俺はその拳を全て避けて的確に腹に一発一発パンチを入れていく。

だが、素手で戦うのは少々限界があるな。多勢に無勢だ。何か武器のようなものがあれば簡単なんだけどな。

すると、小崎の手のひらに傘が握られているのが目に入る。

「小崎！」

「は、はいっ！」

「その傘を貸してくれ！」

「え」

「お願いだ！」

そんな俺の言葉に驚きつつもおおずおおずと傘を差し出してきた。

それを受け取って竹刀のように構える。

「このやろー！」

「めーん！」

俺は掛け声と共にすれ違う瞬間に男の頭に思い切り竹刀を振り下ろした。

それを食らった男は地面に倒れた。

他の男たちも剣道の技を使ってどんどん倒し、遂に全員を倒すことが出来た。

「あ、あんた何者？」

「それよりもさ、俺はこの子に今、消えられたら夢見が悪いから八つ当たりをしたいなら他を当たってくれないか？」

「……」

女子達は面白くないとても言いたげな表情で俺を睨みながら帰っていた。

久々に動いて疲れてしまった。

だが、あいつらを倒すためとはいえ、あれだけ手荒に傘を扱ってしまったのだ。

骨がボロボロになってしまっただけでももう使えるとは思えない見た目になっていた。

「傘、悪いな。これで新しい傘を買ってくれ」
「え？」

俺は傘を弁償するために傘代を渡す。
すると、小崎にとっても驚いた表情をされた。

「いえ、大丈夫ですから！ むしろ助けていただいて感謝しか無いです。なのに傘を弁償してもらうことはできません！」

「いや、でもさ」

「いえ、これは譲れません」

意外と頑固なようだ。

これでは傘代を受け取ってもらうことは出来ない。

しっかし、すっかり俺たちは雨に濡れてしまった。ビショビショで気持ち悪いから家に帰ったらシャワーを浴びよう。

だが、心配なのは小崎だ。

俺は体が丈夫なのでそんなに風邪は引かないが、小崎もビショビショに濡れてしまっているから風を引く可能性がある。

「なあ、小崎の家ってここから近いのか？」

「はい、少し歩くと着きます」

「そうか、じゃあ送って行ってやるよ」

「え、いいんですか？」

「俺ん家も近いんだ。だから問題ない。それよりも、これを羽織っておけ」

そう言っただけが差し出したのは俺の制服の上着だ。

俺は男だからシャツが透けても何ともないが、小崎は小さいとはいえない女の子だ。あんまりシャツが透けるのは良くない。

「あ、ありがとうございます」

「それじゃあ、帰るか」

俺は何かボロボロの傘を開いて何とか差して二人で傘に入っただけで帰った。

その時の小崎の顔が朱に染まっていたのを俺は気が付かなかった。